

「あああつ……熱い……はああつ、んっ、ああつ」

理沙の悲鳴が、甘ったるいものに変化した。秘芽と尿道口の上をいじられる気持ちよさが、尻穴をいじられるおぞましさに勝ったのだ。

身体を硬くするのでもなく、放心してだらりと力が抜けているわけでもなく、内から湧き起こる快美の波に白い肌を震わせて悶えている。

うっすらと汗をまとったお尻の山は、油を塗ったようにぬめ光っていた。甘く酸っぱい汗の匂いが鮮明に香りたつ。

固く閉じていたアヌスは、雅人の指を三本まで受け入れるようになった。第二関節までがたやすく入る。指の腹に感じるアナル粘膜は、腔壁のようにザラザラして、つるつるとした感触で、溶けそうに熱い。

——僕は、理沙さんの、尻の穴の奥まで見てる……。

ワセリンと理沙自身の愛液でふやけたアヌスは、魚の口のようにぽっかりと開いている。雅人のペニスだつて入りそうな感じだった。

まだ一度も欲望を放出していないペニスはギンギンに反りかえっている。雅人は理沙のお尻の脇をしっかりと持つと、亀頭を尻穴に押し当てた。

「ああっ、ああああっ!!」

快感にとろけていた理沙の身体が再び緊張した。かなり拡張したとはいえ、先端の太いところで引つかかるようになって、なかなか奥へ入らない。

「ウツ、り、理沙さん、ち、力抜いて……」

「ああっ。い、いやっ。怖いっ！ 許してえっ!!」

理沙が怖がっている。許して、やめると叫んでいる。雅人を全力で拒んでくる感じが暗い興奮をけしかける。

雅人は、理沙の乳房をいじろうとして手を伸ばした。理沙が激しく身もだえているため、乳房ではなく、脇腹から脇の下までを指先でいじる結果になった。

「やあああんっ」

身体の緊張がふつとゆるんだ。女子高生の身体は敏感で、やさしすぎる愛撫にくすぐったさを覚えてしまうときもあるらしい。

雅人を拒むように固く閉じていたお尻の穴から、ほんの少し力が抜けた。雅人はここぞとばかりに腰をしつかりと持つと、理沙の腰を手前に引くようにしてペニスを突き入れた。

「あっ、く、くくっ……い、いや……あああっ」

亀頭のエラがアヌスにめりこむと、あとはやすやすと入っていく。膣と違って行き

どまりがないため、際限なく深く入りそうだった。

雅人は根元までペニスを突き入れた状態でじっとしていた。ペニスをじゅっぷりと咥えこむアナル粘膜は、ぴちぴちと肉茎を締めつける。

膣と違って複雑さのない形状だが、膣と同じぐらいヌルヌルしていて、たぎるほどに熱い。アナル粘膜はすべすべつるつるした感じなのだが、締めつけの強さは膣とは比べようがないぐらいで、ペニスに痛みを感じるほどだ。

理沙の尻の穴を犯している。氷の女王が雅人にひれ伏している。征服感は相当のもので、笑いだしたくなってしまう。

「い、いや……く、苦しい、い、の……」

悲鳴はもう泣き声に変わっている。理沙は顔をくなくと振った。ポニーテールが跳ねて、毛束の先端がコスチュームの背中を掃く。

「どんなふうに？」

「お、お腹がいつぱいで……おトイレを我慢している感じよっ！ い、いやっ。漏れそうっ。漏れそうよおっ!!」

しくしくと泣き伏す理沙を見おろしていると、いけない快感が雅人の体をいつぱいにした。

